

[ 成果情報名 ] ヒリュウ台「青島温州」の安定生産のための適正着果数

[ 要約 ] ヒリュウ台「青島温州」の植え付け5年目の初着果年は、1樹内の着果数を1立方メートル当たり20果以内とし、2年目は20～30果、3年目以降は30～40果とすると安定して着果数の増加が期待できる。樹齢7～8年目には1樹当たり20kg以上の収量が安定確保できる。

[ キーワード ] ヒリュウ台、青島温州、着果数、葉果比

[ 担当 ] 長崎果樹試・常緑果樹科

[ 連絡先 ] 電話 0957-55-8740、電子メール t.furukawa@pref.nagasaki.lg.jp

[ 区分 ] 果樹

[ 分類 ] 普及

-----  
[ 背景・ねらい ]

摘果、収穫労力の軽減や高糖度ミカンの生産安定にのために、わい性台木であるヒリュウ台木が利用が有効であると考えられる。しかし、ヒリュウ台に適する着果年次別の適正な着果量など栽培方法が明らかにされておらず普及が進んでいない。そこで、ヒリュウ台「青島温州」における、年次別着果量の目安値を明らかにする。

[ 成果の内容・特徴 ]

1. 5年生樹で初着果させた場合に、1立方メートル当たり着果数を20果以内とすると翌年の着果が増加する。着果2年目は1立方メートル当たり20～30果程度、3年目以降は30～40果程度が適正着果数と考えられる。(図1、図2、図3)。
2. 5年生樹で初着果させた場合、初着果年の葉果比が40～50、着果2年目は30、着果3年目以降は25～30程度である(図4)。
3. 4年生樹で初着果させると翌年の着果数が5年目初着果より少ない(図5)。
4. 5年目に初着果するとその後の生産が4年目初着果に比べて安定する(図6)。
5. 7年目以降は、1樹当たり20kg以上の収量が得られ、中玉果で安定生産が可能である(表1)。

[ 成果の活用面・留意点 ]

1. ヒリュウ台「青島温州」は、着花性がよいので着果過多とならないよう枝別摘果などにより適正着果に努める。
2. カラタチ台は通常20～25枚の葉果比が必要とされるが、ヒリュウ台の場合はカラタチ台より5枚程度多い。

[ 具体的データ ]

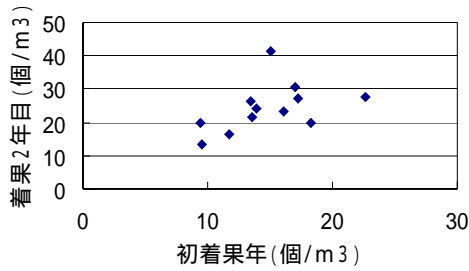


図1 初着果年（5年生樹）と翌年の着果数

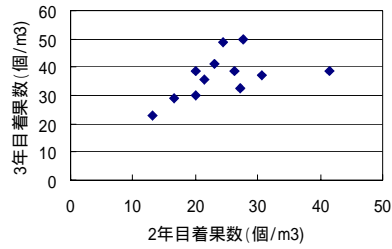


図2 着果2年目と3年目着果数の関係

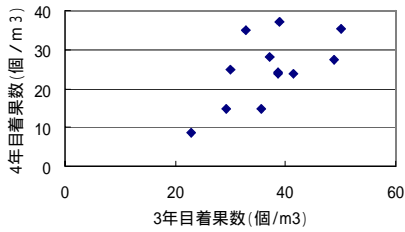


図3 着果3年目と4年目着果数の関係

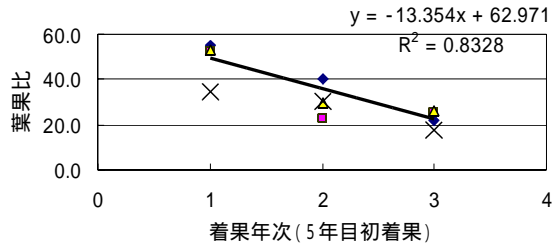
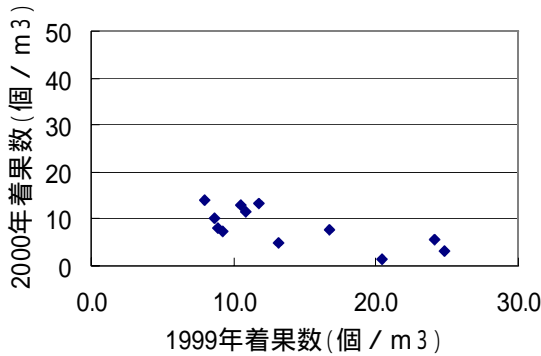


図4 着果年次と葉果比との関係



5 4年生樹初着果と翌年（2000）の着果数

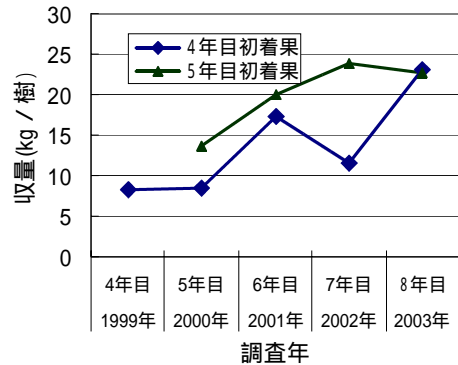


図6 ヒリュウ台「青島温州」の初着果時期の違いと年次別収量

表1 ヒリュウ台「青島温州」の初着果年の違いと果実重、着果数

処 理	1果平均重(g)					着果数(個/m <sup>2</sup> )				
	1999 4年	2000 5年	2001 6年	2002 7年	2003 8年	1999 4年	2000 5年	2001 6年	2002 7年	2003 8年
4年目着果	122	183	109	146	107	13.9	8.3	36	16.1	42.6
5年目着果	-	146	157	107	140	-	14.8	24	37.0	24.8
有意性		**	**	**	**		**	**	**	**

[ その他 ]

研究課題名 : 温州ミカンの品質保証果実の少資材・低コスト生産体系の確立  
 予算区分 : 国庫（地域基幹）  
 研究期間 : 平成11～15年度  
 研究担当者 : 古川 忠、山下義昭